

カントウータ

Cantuta

No. 6

平成 16 年 11 月発行
(社)日本ボリビア協会

協会からのお知らせ

新役員が選出される

去る 7 月 8 日当協会の定期総会が開催されました。昨年度の事業報告及び収支報告が満場一致で可決され、新たに下記の新役員が選出されました。

会 長	山下 徳 夫 (元官房長官・運輸大臣)
副 会 長	林 屋 永 吉 (元ボリビア大使)
専務理事	渡 邊 英 樹 (元日ボ合弁企業社長)
理 事	鎌 田 甲 一 (東大名誉教授) 長 崎 弘 (元トミカパル大使) 大 貫 良 夫 (東大名誉教授) 国 本 伊 代 (中央大学教授) 小 川 秀 樹 (在大阪ボリビア名誉総領事) 杉 田 房 子 (旅行作家ボリビア理事) 今 村 忠 雄 (日本海外協会会長) 細 野 豊 (詩人・駿河台大学講師) 白 石 健 次 (元農林省・JICA 事業部長) 嘉 手 苅 義 男 (在沖縄ボリビア名誉領事) 長 嶺 為 泰 (元ブラジル銀行 WUB 東京会長) 細 萱 恵 子 (元青年協力隊ボリビア文化庁)
監 事	佐 々 木 仁 (元 JICA 職員)

第 2 回理事会開催される

平成 16 年 11 月 1 日午後 4 時より当会事務所において定期総会後の第 1 回理事会に次いで第 2 回理事会を開催しました。出席理事：山下徳夫、林屋永吉、大貫良夫、杉田房子、小川秀樹、今村忠雄、細野豊、長嶺為泰、細萱恵子、渡邊英樹。会長山下徳夫が議長を務め下記の議案を審議した。

議案 1 .平成 17 年 7 月 1 日?平成 17 年 11 月 10 日に岐阜県・光記念館で開催の『インカ文明展』への後援名義の貸与と後援の対応について
後援名義を貸与することで決定しました。

議案 2 .定款の変更について(次期総会への提出議題として)

「第 13 条 役員の任期は 2 年とする。但し、再任を妨げない。」を

「第 13 条 役員の任期は、定期総会から 2 年後の定期総会までの期間とし、任期満了とともに全員が退任するものとする。但し、次の期間続けて就任することを妨げない。

議案 3 . 沖縄ボリビア協会とのチャリティゴルフコンペの共催について
年 1 回冬期に共催して当協会が公認しているボリビアンチャリティゴルフクラブからも参加者を送ることで決定しました。
またそのチャリティ資金の全額を当協会よりボリビア国のワルネス郡育英制度の窓口となっている沖縄ボリビア協会に手渡すことで決定しました。

ボリビアの話題

ガス問題国民投票

2004年7月18日に天然ガス関連で国民投票が実施されたが、5つの質問サンチェス・デ・ロサダ政権時に公布した石油関連法の廃止

石油産出の権利を産出口とする

石油公団の活性化

メサ大統領の政治方針としてガス問題をチリー国と海への出口問題に利用する

ガスは国内需要を補ってから残りを輸出する

のすべてで「はい」が多かったようだ。ガス問題で国民の多くが賛成票を投じたことから、カルロス・メサ政権の今後の動向が注目される。

国民投票にはいろいろなセクターが、質問内容に疑問が多い投票をボイコットするよう呼びかけ、強行手段に出るとの噂もあり、地域によっては緊迫した日を迎えたが、結局は何事もなく、スムーズに投票が行われた。ラパスのボリビア労働連合(COB)やエル・アルト市の市民運動者はボイコットを呼びかけた中心人物たちであったが、ラパスでもエル・アルトでも何事も起きなかったようである。また、村長虐殺で問題となっているアヨアヨ村でも一部の村民が投票ボイコットを呼びかけていて、当日も反対運動を行ったが、結局村民は投票に現れたようである。

サンタクルスでは寒風と雨のあいにくの天気で、事前に登録を済ませた有権者の半分が投票しなかった。投票所に行かなかったのは有権者だけかと思えば、肝心の投票を管理する各投票所の立会人までが寒さのため欠席したために、有権者が列を作って待っているのに投票できないという事態もあり、急いで代理の人たちが立会人となった投票所もあったようである。

立会人及び一般有権者で投票しなかった人たちは罰金が徴収されることになる。選挙法によれば、投票しなかった有権者

は3ヶ月間国外にでられないし、何ら公的手続きも出来ない。例えば、銀行で小切手を現金に換金しようとするとう投票を済ませた印の付いた証明書の提示を求められ、なければ小切手を換金できないといったことがある。

スペインへの出稼ぎ

経済不況の続くボリビアだが出稼ぎのために国民の外国への流出は日々多くなっているようである。ただ、ボリビア国民だけでなく、ペルーやエクアドルの人も多くスペインなどへ出稼ぎに出ているようである。スペインには1995年から2003年まで51万4485人が行っているようで、その内の半分以上がコロンビア、エクアドル、ペルー人のようである。だからと言ってスペインへ行くボリビア国民が少ないとはいえない。なぜならばスペインにいるボリビア国民の数がラテンアメリカの諸国人の中で41番目から14番目になっている。例えば、昨年12月末には1日に600人がスペインへと飛び立っている。ラテンアメリカ諸国に送金される金額については米州開発銀行(BID)が算出するには、年間約380億ドルと見積もっている。ボリビアにも年間多くの送金がされていると予想される。

ボリビア産コーヒーに高い評価

「カフェ・コロイコ」はボリビア国内でも、その品質には定評があり、10年前から少量ながらオランダやドイツに輸出されている。現在輸出量は年間5トンと少ないが、気候的關係から品質の良さや無農薬栽培が好評。3つのカテゴリーのコーヒー豆を輸出している。

各地で続く市町村問題

ラパス県アロマ郡アヨアヨ村の村長さんが住民によって焼き殺されるというショッキングな事件が発生した。事件の発端はベンハミン・アルタミロ(55才)村長の行政に不全があるとして、住民たちが行政の透明化を訴え、最後には中央

政府に介入を求めた。「不正を正してほしい」との要請を政府に出し、「返答がない場合には自分たちの手で解決する」としていた。政府からの返答がないことから、強硬派のグループが7月14日の午後2時ごろラパス市内を歩いていたベンハミン・アルタミラ村長を車で連れ去った。家族は誘拐として警察に訴えたが相手にしてもらえなかった。そして翌日、村の中央広場に黒焦げの死体となって放置されていた。警察は村議員一人を容疑者として拘束しているが、いまだ犯人は捕まっていない。アヨアヨ村には警察や政府関係者も暴動を警戒して近寄ることもできないでいて、無法地帯状態が続いている。

全国340余りの市町村では大なり小なりトラブルが起きているが、サンタクルス県内ではワルネスとプエナビスタが最も深刻である。ワルネスでは昨年町長が2人いるような状態が続き、互いの支持者たちが衝突を繰り返して発砲事件まで発展し、現在は一時閉鎖状態で行政機能がストップしている。住民は一日も早く正常が行政が行われるようにと早急な解決を求めて6月24日の早朝から町の北側と南側で道路封鎖を行って町長問題を訴えた。人々は県知事が来て調整してほしいと要求を出し、カルロス・ウゴ・モリナ知事はワルネスへ行き、町民代表と話し合い、町議会は直ちに議会を再開し、新しい町長を選ぶことを決定、道路封鎖は解除された。プエナビスタでも町長の不正ありと退任を求めているが、いまだ解決に至っていない。

お詫び：前回の臨時グラビア号においてボリビア共和国大統領の名前がガルシア・メサと間違っていて記載されておりました。カルロス・メサ大統領と訂正させて頂くとともにお詫び申し上げます。

日ボ修好90周年記念式典における 大貫良夫東大名誉教授講演

ボリビアの古代文化

大貫良夫
東京大学名誉教授
リトルワールド館長

本日、日本ボリビア修好90周年記念式典においてボリビアの先スペイン期文化についてお話しできることを光栄に存じます。

ボリビアは海拔7千メートル近い万年雪の山からアマゾン川流域の熱帯雨林まで、峻険な地形と多様な自然環境を擁する国であります。ここにボリビア共和国という近代国家ができたのは180年ほど前のことで、その前はスペインの植民地であり、これは1533年からであります。そしてその前には1万年の長きにわたるボリビア先住民の歴史がありました。先住民の歴史は1万年、それに対して植民地から今日までは500年にすぎません。したがって、ボリビアという土地の人間の歴史では、先住民の時代が大半を占めるのであり、その歴史はこの複雑多様なしかも容易ではないボリビア・アンデスの環境と苦闘する過程でありました。その苦闘の成果の上に立って今日のボリビアがあるといえます。ボリビアとペルーを舞台に発展した先スペイン期の諸文化を、人類学や考古学ではアンデス文明と呼びます。

ボリビアでそのアンデス文明を代表する遺跡はティワナク(Tiwanaku)であります。ティワナクは海拔4000メートルもの高原にいくつもの巨大な石造建築物を配置した大都市であり大祭祀センター(centro ceremonial)でありました。鉄・車・大型家畜なくして巨石を加工し運搬し積み上げた、その偉業ともいふべき仕事ぶりは、21世紀の建築技術でも一目置かざるを得ないものであります。また、ティワナクは大小無数の石の彫刻を作っております。なかでも「太陽

の門」と呼ばれる一枚石の彫刻は世界的に有名で、創造神を描いたものといわれます。両手を広げ右手に投槍器 (atlatlo estólica) 左に槍を持つ姿は、「杖を持つ神」(dios con báculos)とも呼ばれます。その姿は土器などの描かれてペルー南部からチリとアルゼンチン北部にかけて広く見出すことができ、ティワナク文化の広がりや影響の範囲の大きさを示しています。

ティワナク文化の最盛期は西暦400年から1000年頃と考えられています。チチカカ湖周辺の平地は灌漑されて豊かな農地になり、その周囲の丘陵ではおびただしい数のアルパカとリヤマが飼育されました。しかしそれだけではティワナクの大国家は支えきれません。そこでティワナク人はペルーのモケグア谷(valle de Moquegua)やサマ谷(valle de Sama)の暖かい谷間を大々的に開発して農業生産地に変えました。また、ラパスの盆地やその東側の低地の開発も行いました。コチャバンバはこうした活動の重要拠点でありました。チチカカ湖の東西にある温暖な低地開発により、熱帯・亜熱帯の農作物がふんだんにティワナクに集まりました。ティワナク国家はこれらに高地に産するジャガイモ、キノア、ラクダ科動物(los camélidos)の肉などを合わせ、それを国民に分配しました。ティワナク国家は、大きな高度差を持つアンデスの環境を組織的に開発し産物の流通と分配のシステムを管理して成功を収めたのであります。この経済システムは「垂直統御」(el control vertical)と呼ばれ、アンデス特有の経済システムであります。アンデス各地で高度差を利用する経済システムは存在しましたが、これほど大規模なものはティワナク文化とその後のインカ帝国時代だけでありました。

ティワナクの石造建築にも独特の技術革新を見ることができます。ひとつは大きな石を目地土なしに積み上げて壁を作る技術です。いわゆる空石積みであります。もうひとつは大石のつなぎに青銅の楔を使う方法です。このふたつとも後の

インカ帝国の石造建築でも使われます。また、ティワナクは銅に錫を混ぜて青銅を作る冶金術を発明しました。ペルーの北海岸では銅にヒ素を混ぜて青銅を作る技術がティワナクより少し後れて発達しますから、後のインカ帝国で盛んに製作された青銅の道具は、ティワナクによって基礎が作られたと言ってよいでしょう。直接的な証拠はないのですが、ティワナクは毛織物の質を飛躍的に高めております。人間の髪の毛よりも細い糸を撚って美しい織物に仕上げる技術は、これまたインカ帝国に引き継がれました。

こうして、ティワナク文化は南アンデス一帯に広く農業や牧畜を広めただけでなく、アンデス文明全体の発展に対しても大きな寄与を成し遂げたのであります。

一方、ティワナクにありながらその後引き継がれなくなった技術があります。それは狩猟具でもあり武器にもなる弓矢であります。ティワナク遺跡からは小さな矢じり(puntas de flecha)がたくさん出土しますが、このような例はティワナク文化の領域以外ではありません。また、幻覚植物を非常に細かい粉末にして吸引するという習慣も、ティワナクとその影響範囲に主として見られるようであります。そして興味深いことにこれら二つの習慣は、アマゾン川やオリノコ川、ラブラタ川の流域の熱帯雨林地帯でごく一般的な習慣であります。このことは、ティワナク文化が何らかの形で東の熱帯低地の文化とつながっていたことを示唆しております。

チチカカ湖の南岸にチリパ(Chiripa)という遺跡があります。広場のまわりに家屋を配置した集落遺跡であります。年代は紀元前1000年頃かそれよりも少し古いと言われます。それはチチカカ湖の周辺で海拔3800メートルから4000メートルにかけての高地に適応した農業が発達する時代であります。このチリパの家屋配置や土器にはアマゾン流域の森林地帯と共通する特徴があります。したがって、ポリビア高地での定住農耕生活の始まりには熱帯雨林の文化がかか

わっているようであり、その後チチカカ湖北岸に発達したプカラ文化(la cultura Pukara)を取り込んで、アマゾン川とアンデス高地および海岸の諸文化の総合としてティワナク文化が生まれたと考えられます。このダイナミックな歴史のくわしく正確な姿を明らかにすること、それが考古学の研究であります。

最近、日本人の若い人の間にボリビアの古代文化を研究したいという人が増えてきております。これからが楽しみであります。日本とボリビアが手を携えて内容豊かで独創性に富んだボリビアの先史文化の解明を手がけてもらいたいものと思います。どうもありがとうございます。

コロニアオキナワ入植50周年 記念式典に参列して

渡邊英樹

(社)日本ボリビア協会専務理事

去る8月15日に挙行された「コロニアオキナワ入植50周年記念式典」に参列のため20年ぶりにボリビアを再訪しました。

まさに、大変な勢いで発展と拡大を続けているサンタクルスの変貌ぶりに圧倒され続けた一週間でした。1969年の赴任当時に人口12万人と言われていた町が、何と人口120万人の大都会に変身していたのです。

このサンタクルス大発展の原動力となった最大の功労者は日本人移住者です。

ボリビア政府が、「植民院」を設けいくら内国植民を奨励しても開拓が一向に進まなかったサンタクルスの原始林の開拓を見事にやり遂げ、未開のジャングルが夢のある土地であることを実証して見せたのがオキナワ・サンファン両移住地の日本人でした。

入植初期に疫病で15名の犠牲者を出し二度の転住を強いられ定住までに2年の歳月を要したオキナワ移住地、途中を流れる河には橋もなく「犬も通わぬ」といわれた高温多雨の土地で人の往来にま

で難渋したサンファン移住地、ここに入植した日本人が「絶対開拓不可能」と現地の人々にさえ思われていた原始林を自らの手と斧で開拓し、文字どおり「不可能」を「可能」にして見せたことのボリビア社会へ与えたインパクトは計り知れないものがあります。

そして、50年の時を経てオキナワ移住地は「小麦の里」サンファン移住地は「米の里」と称されるまでに発展したのです。

オキナワ移住地の耕作面積は沖縄全県の耕作面積とほぼ同じと云われ組合員131名の戸あたりの平均耕作面積は300haにも達します。ちょうど小麦が黄金色に見事に実り、しかも最近では中国からの買い付けもあり、値段も良いとあって皆さんの表情が一段と明るかったのが印象的でした。

そんな中で行われた入植50年の記念式典は、稲嶺沖縄県知事、西銘参議院議員、大城JA沖縄中央会会長、嘉手苅ボリビア名誉領事(オリオンビール副社長)等々母県からも政財界をはじめ親戚縁者の方々が大勢駆けつけ日本国内においてさえ稀有な大式典が挙行されたのでした。

ボリビア共和国カルロス・メサ大統領、サンタクルス州知事、白川光徳日本国特命全権大使、アメリカ合衆国大使等の賓客の列席もありその中で移民資料館の開所式、慰霊塔除幕式、『移住地の父』故パス・エステンソロ大統領の銅像の除幕式等の行事が粛々と行なわれました。

特に、オキナワ移住地への移住を推進された当時の琉球海外協会会長であった故稲嶺一郎先生の息子さんであられる稲嶺知事とその受入を歓迎したエステンソロ大統領のお嬢様が立ち会われての銅像の除幕式は、まさに歴史的なものとなりました。同大統領は生前に「大統領としての最大の功績は、日本人移住者を受入れたこと」とおっしゃっていたそうです。

多くの債務を抱えながらもようやく安定への入り口まできたこの50周年の節目が、次ぎの本当に確実な安定と繁栄に向かう50年のスタートであることを願

いながら再会を約してビルビル空港を後にしました。

セルバンテスとボリビア

- その 3 -

林屋永吉

元スペイン、ボリビア大使

結局セルバンテスの夢はかなえられなかったが、インディアスのことは常に彼の頭から去らなかつたようでそれがその作品のところどころにうかがわれる。

まず「ドンキホーテ」の前篇には三カ所にわたってインディアスに関連する記述が見られる。その内の一つは、インディアスへ渡る主人と会合するためセビリャに向かう一貴婦人の旅の情景(第八章)一つはインディアスへ就いた親せきからの6万ペソを超える送金を受け取るためにセビリャへと旅する司祭の姿(第二十八章)である。セルバンテスは前者に、もしも望みが達せられていた時の妻との再会を、後者に、成功した自分の送金で潤う親類の姿を見ていたかもしれない。

もう一つの記述はアルジェーで捕虜になった男の身の上話に出てくる。これらは親から財産分けをされた三人の兄弟の内の二人 長男は軍人、次男はメキシコ聴聞庁の高官 二十二年後に初めて再会し、末の弟がペルーにおいて巨万の富をつんでいることを知ると言う話である。(第三十九章、第四十三章)これまた、セルバンテスの果たせなかつた夢を記したといえないことはない。「ドンキホーテ」の後編にもインディアスの地名が二つ出てくる。その一つはメキシコで、アンダルシア地方のコルドバと並ぶ、馬術の盛んなところとしてその名が上げられている(第十章)が、もう一つの地名は先にもふれたポトシーである(第七十一章)。「ベネチアの富もポトシーの鉱山も足りないかもしれない」という表現でまさに富の象徴として出てくるが、この鉱山は当時のペルー副王庁の管下、現在はボリビアにあり、1545年の発見以来、スペイン王国の富を支えていた。記録によれば1613年の人口は16万というから新

大陸最大の人口を擁していたわけで、その最盛期である16世紀後半から17世紀中葉にかけてはスペインの各地からあらゆる階層の人々この地に向かい、世界の各地からの贅沢品が集ったといわれる。

「ドンキホーテ」におけるインディアスについての記述はこれだけで断片的なものにすぎないが、1604年頃に書かれたと推定されている模範小説集中の「しつと深いエストレマドゥーラの男」は、主人公自身が48歳になってインディアスへ渡り20年後に財をなして帰ってきた男となっている。セルバンテスが、自分でインディアス行きの陳情書を認めた年齢と同世代の男を主人公に設定していることも面白いが、この小説の冒頭で彼がインディアスに付した形容句はさらに興味深い。即ち彼はインディアスを、「エスアの失望した者達にとっての避難所であり、庇護所、反乱を企図した者にとっては暮らしの道具と糧、放蕩女にとっては仕掛けられたわな」とし、更に「多くの者は欺かれるのが普通、僅かの者だけの救い」とつづけている。当時のスペイン社会における脱落者にとっては、たしかに新大陸は希望の新天地であったに違いないが、その多くは期待に裏切られて彼地で果ててしまったというのも現実であったらう。セルバンテスは「多くの者は欺かれるのが普通」という最後の一句を付すことによって、夢を果たすことが出来なかつた自らを慰めているのかもしれない。

セルバンテスの陳情があつてから370年を経過した1960年、ラ・パス市の市会は、「王権によって拒否された文豪の望みを住民の総意によって叶えよう」ということで、同年10月20日付をもって、セルバンテスを永久代官に任命する市条令を満場一致で可決した。まことに粋な計らいというべきだろうが、スペイン本国のマドリッド市長は、これに直ちに応え、同市のラス・コルテス広場に建てられているセルバンテスの銅像の複製を1961年10月17日ラ・パス市長に寄贈する筈にでた。そしてこの銅

像は現在、ラ・パス市のやや小高くなった閑静な住宅地域にあるスペイン広場に、万年雪に覆われたイリマニの峰を背にして建立されている。

(おわり)

ボリビア自話

産業革命の進展とゴム需要の激増

- その3 -

高畑敏夫
元ボリビア大使

バラゴムノキはアマゾン河流域原産で、樹高30メートル、直径50センチを超えるほどに成長しうる。その樹脂が同河口に近いバラ(ベレン)港からヨーロッパに積み出されたのでバラゴムといわれた。英語の“rubber”は英国の科学者プリーストリー(joseph priestley 1733 ~ 1804)が1770年に、生ゴムが鉛筆の字を消すのに適することを紹介してから、『rub(擦る)するもの』という意味で使われるようになった。

コロンブスは第2回航海(1495)の際に西インド諸島でゴムボールを観察している。16世紀に南米大陸を訪れたヨーロッパ人は、現地人がバラゴムノキの樹幹に傷をつけてラテックスを採取していることを知った。

フランスの学者ラ・コンダミーヌ(Charles Maric de La Condamine 1701 ~ 74)は「地球の子午線は赤道に近づくに連れて長くなる」とするニュートン説に対する反論を実証しようとして、当時のフランスで最も権威ある植物学者や天文学者を伴って新大陸の熱帯地方を訪れた。一行がキトーで任務を終えた後、ラ・コンダミーヌはアマゾンの川下りを行っている。彼は1745年、パリの科学アカデミーで『南アメリカ内陸旅行略史』を発表したが、その中でゴムに関し、「エスメラルグス地方にはへべと呼ばれる樹が生えている。樹皮に一筋の切込みを入れると、切り口から牛乳のような白い液が流れ出、空気に触れて徐々に黒く固まる。(中略)

マヤ・インディオはこの樹から採れる樹脂を『カウチュ』(cautchu)と呼ぶ。これは「涙を流す木」(木(cac)、涙(ochu))を意味している。」と記述し、そのとき生ゴムの見本を提出している。

ゴムは新大陸の先住民によって早くから知られており、球技用の毬、注入器(セリング)、防水加工用材料などとして利用されていた。ブラジルではゴムの採集林を「セリングル」、ゴム採集労働者を「セリングイロ」と呼ぶ。

18世紀初頭、バラのポルトガル人は先住民からラテックスを型の周りに塗布して容器やブーツを作ったり、屋根に流して防水効果を与える方法を教わった。その後ゴムは商品化され、輸出までされるようになるが、その利用方法は長い間前記のような用途やホース、ゴム栓、バンドなどに限られていた。

その後ヨーロッパで、ゴムに配合剤を加えること、溶剤で溶かして使用すること、アンモニアを加えてラテックスを安定化して輸送することなど多くの発見があった。1823年にアイルランド人マッキントッシュ(Charles macintosh 1766 ~ 1843)がゴム引き布を工業化し、その7年後にはハンコック(Thomas Hancock 1786 ~ 1865)が生ゴムを成型加工する方法を発見した。

さらに1839年にはヘーワード(N/M. Hayward)が生ゴムに硫黄を加え、加熱して、低温、高温でも弾力性の持続を可能にする熱加硫法を発見したことにより、ゴムの物理的性質が劇的に改善され、米国のグッドイヤー(Charles Goodyear 1800 ~ 60)がこれを実用化して初めてタイヤの製造が可能となった。硫黄を加えて加熱すると生ゴムの分子と硫黄とが化学反応を起こして結合し、強固なゴム製品が出来るのである。生ゴムは、何千、何万という柔らかいゴム糸が蛇がとぐろを巻いているような構造をしている。これに加硫すると、隣同士や近所同士のゴム糸が硫黄を間にして結合され、ゴム弾性体となる。普通、硫黄の量ではゴムの2 ~ 5%程度なので、ゴム弾性体の中で結合

している部分はごく少ない箇所に分散している。生ゴムもゴム弾性を持っているが、分子を固定している部分が無いので生ゴムを引っ張ると非常に弱い力でも隣同士の分子のずれが起こって復元しなくなり、さらに引っ張ると簡単に切れてしまう。これに対し加硫ゴムでは加硫による分子の固定により隣同士の分子のずれが起こらないため、いつまでもゴム弾性が維持されるのである。

1888年にはスコットランドの獣医ダンロップ(John B. Dunlop 1840~1921)が息子の三輪車を修理しているときに空気入りのタイヤを発明し、特許をとった。その4年後にはミシュラン(André Michelin 1853~1931)が最初の取り外し可能なタイヤを発明している。

じゃがいもの旅の物語

インカからジパングまで NO.6

杉田房子
旅行作家

「半年でいなくなるという者もいるが、ピラコチャはいつまでもいるだろう。いなくなってもまたすぐに戻ってくる。どんな山奥にもやってきて、わしらを従わせようとするに違いない」

村長は、低い声で村人に言った。

「村では長老が避難場所を用意しているはずだ。わしらは、捧げ物のなかでチユノを最後まで残す算段をしよう、これだけの荷だ。ピラコチャは気がつかないかもしれん」

落日が、夕闇の上にくっきりとアンデスの山稜を浮き上がらせていた。白雪か氷河か、はるか後方に連なる嶺々が黄金色にきらめくのを、村長たちはじっと見つめた。

太陽の祭りは、インカの皇帝が13代にわたり、1000年近くも続けてきた。アンデスの町や村では、神殿にトウモロコシ酒を供え、広場の祭壇にじゃがいもをはじめとする収穫を捧げる。けれど、

山裾の町の広場に、その年ほど捧げ物が積まれたことはなかった。

ピラコチャが数人、広場に面した家の前でインディオの女たちを抱き寄せ、積まれた山をニヤニヤしながら眺めている。女たちは、刺繍模様の帯で結んだ腰布もはだけ、肩から腰まで覆うショールもしどけなくよじれていた。

「よう。女どもにしっかり子種を仕込んでやったろうな」

広場の真ん中で、役人と通訳に荷を仕分けを指図していたピラコチャが吠えた時、村長の隊列の荷を下ろす順番がまわってきた。役人と通訳が、山奥の村の名と、運んできた物とをピラコチャに伝える。金銀の袋を眺めてピラコチャは唾を吐いた。

「これだけか。金銀は山でとれる。こいつらは山奥からきた。ああいうのを隠しておるな」

顎をしゃくった先に、積み上げた金銀が光っていた。子供ほどもある金の人間像。翼をひろげた金の鳥像。灌木のような金銀の燭台。たらいともみえる銀盤。皇帝の授ける栄誉の金細工の山に、褒章の銀片の束……。

「この村は貧しいから、金銀は少ない。その代わりに、パパスはアンデスで一番美味しい。それにチユノ。何年でも保つ素晴らしい食物」

役人と通訳のとりなしにも目を怒らせていたピラコチャは、黒と白の、石そっくりなじゃがいもを示されると、あっけにとられた。通訳にくわしく説明させているうちに、顔色が改まっていく。

「この食物があれば、どんなに海の遠くまで行っても心配ないというわけか。よし、これはいい。もっと持ってこさせる。あるだけ持ってこさせい」

「それではわしらが飢えてしまう。代わりのもので堪忍してください」

村長の返事がどういう通訳されたのか、ピラコチャが役人と通訳を怒鳴りつけ、それでも話が手間取っていると、腰の剣を抜いた。

「危ない、村長さま」

早口の男が村長をかばい、あとの村人も飛び出す前で、剣がきらっと光った。早口の男がよろめき、すくんだ村人の前で、もう一度光がきらめくと、早口の男は絶叫して倒れた。白いチュノが血しぶきに濡れる。

「お前」

早口の男の目に、抱きついた村長の顔と、山奥の村の光景とが重なって見えた。出発前夜に見つめていた女房の顔が浮かんだ。そうだ、帰らなければ。必ず必ず帰ってくるんだよと言っていたな。

「わかったか。言われたとおりにやれ」

息を吞んで静まり返る広場と群衆と、アンデスの大地が生んだ数々のものごとを、陽光が白々と照らしていた。

1533年6月の冬至の日、太陽は低く中天で輝いていた。しかし、山地にも平野にも、町にも、太陽の祭はなかった。陽光は、都の城の石室に捕われている皇帝にも届かず、白いチュノを赤く染めて倒れている早口の男はもう二度とアンデスの太陽を仰ぐこともない。

WIPHALAの持つ意味

勘葉芳一・猫野滋磨
翻訳家

ボリビア高地の農民が何か権利を求めて行進するとき、四角い彩色とりどりの旗を持っているのを見た人は多いでしょう。単なる布切れの寄せ集めに見えますが、この三原色の組み合わせのような彩色の旗にはれっきとした意味が込められています。

この旗はWIPHALA（ウイパーラ）と言い、TAWANTIN-SUYO（タワンティンスーヨ、インカ帝国の領土）の各領土をあらわしています。同じ大きさの四角が並ぶのは領土すべて平等だと言う意味合いもあります。

ボリビアのアンデス地方の寒村、貧農区域ではこの旗は時代とともにKARAS（カーラス・白人）に対する反抗の象徴として振られるようになりました。部落

の農民たちは誇りを持ってこのウイパーラを振りかざし、寒さや飢餓に耐えながらAYLLUからAYLLU（アイユ、部落?）を練り歩きました。しかし、この旗の本来の意味を知る人は多くありません。

オスカル・パフチェコ先生（民族数学の研究家）によるとこの旗はただ単なる色分けをされただけでなく、綿密な数学的解釈が施されていると説明しています。学術的な解釈はさておいて、文化的な深い意味合いを探りましょう。

白はインカ社会では知的作業、黒は手作業を意味します。両作業とも行動と運動で結合します。赤は知識、賢明、思考を表します。黄色は精神と物質、そして祖先の宗教的儀式を表します。

緑は領土、動物、植物に敬意を表しており、また農的作業の意味合いも込められています。続いて青は星、雨など気象的現象と宇宙をあらわします。また天文学との繋がりもあります。そして最後に一番目立つ紫は部落やアイユの政治的、社会的構造を表しています。

この七つの彩色はななめに七つの四角で旗の中に組み込まれています。白の対角線はKOLLAS文化と他の文化との中心的出会いであり、斜めの線はURINSAYA（ウリンサーヤ）とARANSAYA（アランサーヤ）の出会いを表しています。

サンタクルスの街道では県中央労働組合(COD)やサンタクルス地方原住民の機関(Cidob)の行進などでこのウイパーラの旗が振られるのが見られます。ただこれまでこの旗が各部落や町を、その望みや要望を伝言してなびく真の意味合いを知ろうと、また深く探求しようとする人はそれほど多くありません。

EL DEBER, EXTRA 紙
日曜日、2002年5月27日号掲載記事 (W. LANDA 記者)を翻訳。

ボリビア人が見た日本

ペ - テル・マクファレン
細野 豊・訳

太陽の帝国日本を訪れる際に最も重要なのは、新たな世界に対して頭と心を開くことだ

伝統的なもの、精神的なもの、技術及び物質的なものの組合せが、この国への訪問を魅力的で忘れがたいものにする

数多くの日本人といくらかの外国人が、東京の中心地にある歌舞伎座へ数世紀前に作られた偉大な演劇を鑑賞するため決められた時間に入って行く。その上演時間は5時間に及ぶ。数区画離れた銀座の商店街では、日本人や外国人がソニーの提供する犬ロボットその他の最新技術に見惚れている。古いもの、伝統的なものそして近代的なものが、世界中で最も興味深く、ダイナミックで、不可思議なこの国に共存している。

日本は、一方で世界第二の経済大国であり、最近の50年間で経済的、技術的に最高の発展を遂げた国でありながら、そのために文化的伝統を失うということがなかった。

「日本は、その歴史と文化的伝統を維持しつつ、同時に経済的、技術的に最も進歩した国なのです。」と佐々木肇（注）駐ボリビア日本大使は指摘する。同大使は、「先住民の人口が非常に多いボリビアにとって、人々と文化の独自性を維持することはとても重要です。ボリビアは、とても美しい特色を持っているのですから、日本の例に倣ってそれを保持する必要があります。」とも言っている。

日本と言うと、通常トヨタ、ソニー、ニッサン、寿司そして工業の発達と同義語のようにになっているが、決してそれだけではない。10日間にわたる日本訪問の間に、私は思いがけず魅力的で、同時に驚異に満ちた世界に足を踏み入れることが出来た。それはまた、6、800の

島々からなる群島で、ボリビアの三分の一の国土に1億2千7百万人が暮らしているというこの国に対する先入観を打ち壊すのによい機会でもあった。

東京、すべての中心

東京の中心部に、日本の政治と精神の象徴である皇居がある。皇居は、特別の機会にしか一般に公開されないの、普段は外からその美しい森、周囲を取り囲むお堀、橋や櫓を見ることになる。

皇居の近くに銀座があるが、そこは世界中で最もよく知られ、またおそらく物の値段が最も高価な買物の場所である。ここには、世界で最も有名なブランド商品が揃っている。

隣接するいくつかの通りには、値段の高いものからそうでないものまで、数多くのレストランが立ち並び、高くない所では、10ドルから15ドル相当の円でとてもいいものを食べることが出来る。豪勢にしかも安く食べる秘訣は、観光客目当ての場所や豪華なレストランを避け、1千2百万人の東京住民がよく行く食堂街に狙いをつけることである。

東京には数多くのレストランがあり、美味しい蕎麦、うどん、ラーメンから寿司、天麩羅、照焼き、鰻に至るまで種々の料理を妥当な値段で提供している。東京は、世界中で最も物価の高い都市だと思われているが、それでも妥当な値段で買物をし、博物館に行き、出し物を見ることは可能である。

銀座のすぐ近くに歌舞伎座があり、歌舞伎と呼ばれる日本の演劇を上演している。歌舞伎座に入って、4、5時間に及ぶ出し物を見ることは、この上なく忘れがたい経験である。それらは、17世紀、18世紀に作られた名作の再演であり、俳優は全員男性である（そこに居並ぶ“美女たち”を見ると、信じがたいことであるが）、3、4回に及ぶ休憩時間には、人々は老いも若きもロビ - に出て寿司やデザ - トやうどん食べる。食事は演劇作品と同様に重要なのだ。舞台装置は、17世紀及び18世紀の日本の生活を再現して

いて、まことに美しい。

歴史と商業の宝庫

東京では、素晴らしい博物館を巡るだけで数日かかる。かつて江戸と呼ばれていた東京の歴史について、一つの見方を持つようになるためには、江戸東京博物館を訪れる必要がある。その建物は壮大である。そこでは、日本が1868年に如何にして西洋に門戸を開き始めたかを見ることが出来る。

江戸は、商業と手工芸と調理で生計を立てていた都市であった。第二次大戦中に、東京は連合国が行った爆撃とそれによる火災で、主要な部分が破壊された。この大戦の終盤に広島と長崎で行われた破壊が最もよく知られているが、東京もまた戦争中に甚大な被害を受け、殆ど完全に破壊された。

日本での10日間私のガイドを務めてくれた竹林まりさんは私に、彼女の家族が戦争中どれほどアメリカ人を憎みつつ成長したかを、そして矛盾したことだが、その彼らが現在はアメリカに住んで、高度技術の企業で働いているのだということをお話してくれた。彼らは、アメリカを憎んでいた当時、数十年後に日本とアメリカがこれほど重要な同盟国になろうとは、思いもしなかっただろう。

日本科学未来館は、私が見たうちで最も印象的な科学博物館である。それは科学技術研究の最新式の殿堂であり、日本が何故世界で最も重要な経済技術大国なのかを解らせてくれる。

ここでは、子供も青年も大人も世界、人体、インタ-ネット、宇宙、海等々について調査することが出来る。ロビ-にある巨大な地球儀は、世界中の現在の気候を示している。その近くには、未来の自動車が展示されている。上の方では、ホンダが開発したロボットが動き回っており、その歩き方や話し方は殆ど人間と同じである。

東京での最終日に、竹林さんは世界最大の魚市場へ私を連れて行ってくれた。そこでは数千の人々が働き、世界各地か

ら搬入された2千8百万ドルに上る魚が扱われている。7千ドルもする鮪が競りにかけられ、数時間後には日本中のレストランに届けられて、寿司、刺身及び種々の魚料理として顧客の胃袋を満たす。(次号につづく)

(注) 佐々木肇大使は、04年2月に離任、帰国し、後任として白川光徳大使が就任した。

この記事は、ボリビアの雑誌“OH”(03年7月27日付)に発表されたものです。本号と次号の2回に分けて、全文を掲載します。

なお、その間「ボリビアで活躍する日系人」は、お休みします。

リレー随筆の募集

次回から『リレー随筆』を開始致したいと思います。原則としてリレー随筆の執筆者が次号の執筆者を指名するという形で進めて行きたいと思います。従って執筆者はご自分の随筆の最後に「次号はさんをお願いします。」とバトンタッチの相手をご指名ください。

どうしてもその相手が思い浮かばない方は当編集委員会にご相談ください。

原稿は800字から1200字でお願い致します。

なおパソコンを利用できる方はOFFICE WORDで原稿を作成し、E-mailまたはフロッピー、メモリースティックなどでお送り下さると大変ありがたいです。

題材はボリビアでの体験やそれに基づくご意見、滞在中に感銘を受けた話などで結構ですが、自己紹介の意味でボリビアとの関わりを数行お書き頂いた上で本題に入っていたら幸いです。

トップバッターご希望の方はご一報ください。

(編集委員会)